

二葉亭四迷全集

第一卷

昭和三十九年九月二十六日 第一刷発行 ©

創作・翻譯一

定価四〇〇円

著者 二葉亭四迷

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地

発行者 岩波雄二郎

東京都板橋区板橋町六丁目三二八九番地

印刷者 白井知一

発行所 岩波書店

東京都千代田区
神田一ツ橋二丁目三番地
株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

浮雲		三
あひゞき（ツルゲーネフ）明治二十一年〔國民之友〕		一五七
めぐりあひ（ツルゲーネフ）明治二十一年〔都の花〕		一七一
片戀（ツルゲーネフ）		二〇九
奇遇（ツルゲーネフ）明治二十九年〔單行本片戀〕		二六九
あひゞき（ツルゲーネフ）明治二十九年〔單行本片戀〕		三〇三
肖像畫（ゴーゴリ）		三一五

夢かたり（ツルゲーネフ）……………三七五

「浮雲」「あひゞき」「めぐりあひ」（奇遇）「片戀」の反響……………三九七

解説……………四一七

浮うき

雲ぐも

浮雲はしがき

薔薇の花は頭に咲いて活人は繒となる世の中獨り文章而已は微の生えた陳蕃翰の四角張りたるに頬返しを附けかね又は舌足らずの物言を學びて口に涎を流すは拙し是はどうでも言文一途の事だと思立ては矢も楯もなく文明の風改良の熱一度に寄せ來るとさくさ紛れお先眞闇三寶荒神さまと春のや先生を頼み奉り缺硯に牖の月の雫を受けて墨摺流す空のきはひ夕立の雨の一しきりさら／＼さつと書流せばアラ無情始末にゆかね浮雲めが艶しき月の面影を思ひ懸なく閉籠て黒白も分かぬ烏夜玉のやみらみつちやな小説が出来しぞやと我ながら肝を潰して此書の巻端に序するものは

明治丁亥初夏

二葉亭四迷

第一編

第一回 ア、ラ怪しの人の學動

千早振る神無月も最早跡二日の餘波となつた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうよ／＼ぞよ／＼湧出でゝ來るのは、孰れも顯を氣にし給ふ方々。しかし熟々見て驚と點檢すると、是れにも種々種類のあるもので、まづ髭から書立てれば、口髭、頬髭、顴の鬚、暴に興起した拿破崙髭に、狎の口めいた比斯馬克髭、そのほか矮髭、鬚髭、ありやなしやの幻の髭と、濃くも淡くもいろ／＼に分る。髭に續いて差ひのあるのは服飾。白木屋仕込みの黒物つくめには佛蘭西皮の靴の配飾はありうち、之を召す方様の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしといふ。是れより降つては、背皺よると枕詞の付く「スコツチ」の背廣にゴリ／＼するほどの牛の毛皮靴、そこで踵に

お飾を絶さぬ所から泥に尾を曳く鰐甲洋袴、いづれも釣しんぼうの苦患を今に脱せぬ貌付、デモ持主は得意なもので、髭あり服あり我また奚をか寛めんと濟した顔色で、火をくれた木頭と反身ッてお歸り遊ばす、イヤお羨しいことだ。其後より續いて出てお出でなさるは孰れも胡麻鹽頭、弓と曲げて張の弱い腰に無残や空辨當を振垂げてヨタ／＼ものでお歸りなさる。さては老朽しても流石はまだ職に堪へるものか、しかし日本服でも勤められるお手軽なお身の上、さりとてまたお氣の毒な。

途上人影の稀れに成つた頃、同じ見附の内より兩人の少年が話しながら出て參つた。一人は年齢二十二三の男、顔色は蒼味七分に土氣三分、どうも宜敷ないが、秀た眉に儼然とした眼付で、ズーと押徹つた鼻筋、唯惜哉口元が些と尋常でないばかり。しかし締はよささうゆゑ、繪草紙屋の前に立つても、パツクリ開くなどといふ氣遣ひは有るまいか。兎に角颯が尖つて頬骨が露れ、非道く癪れてゐる故か顔の造作がとげ／＼し

てゐて、愛嬌氣といつたら微塵もなし。醜くはないが何處ともなくケンがある。背はスリリとしてゐるばかりで左而已高いといふ程でもないが、瘦肉ゆゑ、半鐘なんとやらといふ人聞の悪い渾名に縁が有りさうで、年數物ながら摺疊皺の存じた霜降「スコッチ」の服を身に纏ッて、組紐を盤帶にした帽檐廣な黒羅紗の帽子を戴いてゐ、今一人は、前の男より二ツ三ツ兄らしく、中肉中背で色白の丸顔、口元の尋常な所から眼付のバツチリとした所は仲々の好男子ながら、顔立がひねてこせ／＼してゐるので、何となく品格のない男。黒羅紗の半「フロックコート」に同じ色の「チヨツキ」、洋袴は何か乙な縞羅紗で、リウとした衣裳附、縁の卷上ツた釜底形の黒の帽子を眉深に冠り、左の手を隠袋へ差入れ、右の手で細々とした杖を玩物にしながら、高い男に向ひ、

「しかしネー、若し果して課長が我輩を信用してゐるなら、蓋し已むを得ざるに出でたんだ。何故と言ッて見給へ、局員四十有餘名と言やア大層のやうだけれど

も、皆腰の曲つた老爺に非ざれば氣の利かない奴ばかりだらう。其内で、かう言やア可笑しい様だけれども、若手でサ、原書も些たア囁つてゐてサ、而して事務を取らせて擲の往く者と言つたら、マア我輩二三人だ。だから若し果して信用してゐるのなら、已を得ないのサ。」

「けれども山口を見給へ、事務を取らせたら彼の男程擲の往く者はあるまいけれども、矢張免を喰つたぢやアないか。」

「彼奴はいかん、彼奴は馬鹿だからいかん。」

「何故。」

「何故と言つて、彼奴は馬鹿だ、課長に向つて此間のやうな事を言ふ所を見りやア、彌馬鹿だ。」

「あれは全體課長が悪いサ、自分が不條理な事を言付けながら、何にもあんなに頭ごなしにいふこともない。」

「それは課長の方が或は不條理かも知れぬが、しかし苟も長官たる者に向つて抵抗を試みるなどといふな

ア、馬鹿の骨頂だ。まづ考へて見給へ、山口は何んだ、屬吏ぢやアないか。屬吏ならば、假令ひ課長の言付を條理と思つたにしろ思はぬにしろ、ハイ／＼言つて其通り處辨して往きやア、職分は盡きてるぢやアないか。然るに彼奴のやうに、苟も課長たる者に向つてあんな差圖がましい事を……」

「イヤあれは指圖ぢやアない、注意サ。」

「フム乙う山口を辯護するネ、矢張同病相憐れむのか、アハ／＼。」

高い男は中背の男の顔を尻眼にかけて口を鉗むで仕舞つたので談話がすこし中絶れる。錦町へ曲り込んで二ツ目の横町の角まで參つた時、中背の男は不圖立止つて、

「ダガ君の免を喰たのは、弔すべくまた賀すべしだぜ。」

「何故。」

「何故と言つて、君、是れからは朝から晩まで情婦の側にへばり付てゐる事が出来らアネ。アハ／＼。」

「フ、ン、馬鹿を言給ふな。」

ト高い男は顔に似氣なく微笑を含み、さて失敬の挨拶も手輕るく、別れて獨り小川町の方へ參る。顔の微笑がいかはく消え往くにつれ、足取も次第く緩かになつて、終には蟲の這ふ様になり、悄然と頭をうな垂れて二三町程も參つた頃、不圖立止りて四邊を回顧し、駭然として二足三足立戻つて、トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸作りの二階家へ這入る。一所に這入つて見よう。

高い男は玄關を通り抜けて縁側へ立出ると、傍の坐舖の障子がスラリ開いて、年頃十八九の婦人の首、チヨンポリとした摘ッ鼻と、日の丸の紋を染抜いたムツクリとした頬とで、その持主の身分が知れるといふ奴が、ヌツト出る。

「お歸なさいまし。」

トいつて、何故か口舐ずりをする。

「叔母さんは。」

「先程お嬢さまと何處らへか。」

「さう。」

ト言捨て、高い男は縁側を傳つて參り、突當りの段梯子を登つて二階へ上る。茲處は六疊の小坐舖、一間の床に三尺の押入れ付、三方は壁で唯南ばかりが障子になつてゐる。床に掛けた軸は隅々も既に蟲喰んで、床花瓶に投入れた二本三本の蝦夷菊は、うら枯れて枯葉がち。坐舖の一隅を顧みると古びた机が一脚据ゑ付けてあつて、筆、ペン、楊枝などを擱挿しにした筆立一個に、齒磨の函と肩を比べた赤間の硯が一面載せてある。机の側に押立たは二本立の書函、是には小形の爛缶が載せてある。机の下に差入れたは縁の缺けた火入、是れには摺附木の死體が横つてゐる。其外坐舖一杯に敷詰めた毛團、衣紋竹に釣るした袷衣、柱の釘に懸けた手拭、いづれを見ても皆年數物、その證據には手擦れてゐて古色蒼然たり、だが自ら秩然と取旁付けてゐる。

高い男は徐かに和服に着替へ、脱棄てた服を疊みかけて見て、舌鼓を撃ちながら其儘押入へへし込んで仕

舞ふ。所へトバクサと上ッて來たは例の日の丸の紋を染抜いた首の持主、横巾の廣い筋骨の逞しい、ズンゲリ、ムツクリとした生理學上の美人で、持つて來た郵便を高い男の前に差置いて、

「アノー先刻此郵便が。」

「ア、さう、何處から來たんだ。」
ト郵便を手を取つて見て、

「ウー、國からか。」

「アノネ貴君、今日のお嬢さまのお服飾は、ほんとにお目に懸け度やうでしたヨ。まづネ、お下着が格子縞の黄八丈で、お上着はパツとした宜引縞の糸織で、お髪は何時ものイボジリ捲きでしたがネ、お搔頭は此間出雲屋からお取んなすつたこんな」と故意／＼手で形を拵らへて見せ、

「薔薇の花搔頭でネ、それは／＼お美しう御座いましたヨ……私もあんな帶留が一ツ欲しいけれども……」と些し寒いで

「お嬢さまはお化粧なんぞはしないと仰しやるけれど

も、今日はなんでも内々で薄化粧なすつたに違ひありませんヨ。だつてなんぼ色がお白ツてあんなに……私も家にゐる時分は是れでもヘタクタ施けたもんでしたがネ、此家へ上ッてからお正月ばかりにして不斷は施けないの、施けてもいゝけれども御新造さまの悪口が厭ですワ、だつて何時かもお客様のいらッしやる前で、「鍋のお白粉を施けたところは全然炭團へ霜が降つたやうで御座います」ツて……餘りぢやア有りませんか、ネー貴君、なんぼ私が不器量だツて餘りぢやアありませんか。」

ト敵手が傍にでもゐるやうに、眞黒になつてまくしかける。高い男は先程より、手紙を把ツては讀かけ讀かけてはまた下へ措きなどして、さも迷惑な體、此時も唯「フム」と鼻を鳴らした而已で更に取合はぬゆゑ、生理學上の美人は左なくとも鰭壊れさうな兩頬をいとい膨脹らして、ツンとして二階を降りる。其後姿を目送ツて高い男はホツト顔、また手早く手紙を取上げて讀下す、その文言に

一筆示し、さても時こうがら日増しにお寒う相成り候へども御無事にお勤め被成候や、そののみにんじくらし、母事も此頃はめつきり年をとり、髪おまかたの毛も大方は白髪しろがみになるにつき心まで愚痴に相成候と見え、今年の晩には御地へ参られるとは知りつゝも、何となう待遠にて、毎日ひにち指のみ折暮らし、どうぞ／＼一日も早うお引取下され度念じ、さる廿四日は父上の……

と讀みさして覺えずも手紙を取落し、腕を組んでホツト溜息。

第二回 風變りな戀の初峯入 上

高い男と假に名乗らせた男は本名を内海文三と言つて静岡縣の者で、父親は舊幕府に仕へて俸祿を食だ者で有つたが、幕府倒れて王政古に復り時津風に靡かぬ民草もない明治の御世に成つてからは、舊里静岡に蟄居して暫らくは儉食の民となり、爲すこともなく昨日と送り今日と暮らす内、坐して食へば山も空しの

諺に漏れず、次第々々に貯蓄の手薄になる所から足掻き出したが、偕木から落ちた猿猴の身といふものは意久地の無い者で、腕は眞陰流に固つてゐても鋤鍬は使へず、口は左様然らばと重く成つてゐて見れば急にはヘイの音も出されず、といつて天秤を肩へ當るも家名の汚れ外聞が見つとも宜くないといふので、足を描木に駈廻つて辛くして静岡藩の史生に住込み、ヤレ嬉しやと言つた所が腰辨當の境界、なか／＼浮み上る程には参らぬが、デモ感心には多も無い資本を吝まずして一子文三に學問を仕込む。まづ朝勃然起る、辨當を背負はせて學校へ出て遣る、歸つて来る、直ちに傍近の私塾へ通はせると言ふのだから、あけしい間がない。迎も餘所外の小供では續かないが、其處は文三、性質が内端だけに學問には向くと見えて、餘りしぶりもせずして出て参る。尤も途に蜻蛉を追ふ友を見てフト氣まぐれて遊び暮らし、悄然として裏口から立戻つて来る事も無いではないが、其は邂逅の事で、マ、大方は勉強する。其内に學問の味も出て来る、サア面白くな

るから、昨日までは督責されなければ取出さなかつた書物をも今日は我から繙くやうになり、随つて學業も進歩するので、人も賞讃せば兩親も喜ばしく、子の生長に其身の老るを忘れて春を送り秋を迎へる内、文三の十四といふ春、待に待た卒業も首尾よく済んだのでヤレ嬉しやといふ間もなく、父親は不圖感染した風邪から餘病を引出し、年比の心勞も手傳てドット床に就く。藥餌、呪、加持祈禱と人の善いと言ふ程の事を爲盡して見たが、さて驗も見えず、次第々々に頼み少なに成て、遂に文三の事を言ひ死に果敢なく成て仕舞ふ。生殘た妻子の愁傷は實に比喩を取るに言葉もなくばかり、「嗟矣幾程歎いても仕方がない」トいふ口の下からツイ袖に置くは泪の露、漸くの事で空しき骸を菩提所へ送りて茶毘一片の烟と立上らせて仕舞ふ。さて擗人が沒してから家計は一方ならぬ困難、藥禮と葬式の雜用とに多もない貯蓄をゲツソリ遣ひ減らして、今は残り少なくなる。デモ母親は男勝りの氣丈者、貧苦にめげない熒熒の業の片手間に一枚三厘の襷衣を縫け

て、身を粉にして擗了ぐに追付く貧乏もないか、如何か斯うか湯なり粥なりを啜て、公債の利の細い烟を立てゝゐる。文三は父親の存生中より、家計の困難に心附かぬでは無いが、何と言てもまだ幼少の事、何時までも其で居られるやうな心地がされて、親思ひの心から、今に坊が彼して斯うしてと、年齢には増えた事を言ひ出しては兩親に袂を絞らせた事は有ても、又何處ともなく他愛のない所も有て、浪に漂ふ浮艸の、うか／＼として月日を重ねたが、父の死後便のない母親の辛苦心勞を見るに付け聞くに付け、小供心にも心細くもまた悲しく、始めて浮世の鹽が身に浸みて、夢の覺たやうな心地。是れからは給事なりともして、母親の手足にはならずとも責めて我口だけはとおもふ由をも母に告げて相談をしてゐると、捨る神あれば助る神ありで、文三だけは東京に居る叔父の許へ引取られる事になり、泣の泪で靜岡を發足して叔父を便つて出京したのは明治十一年、文三が十五に成た春の事とか。

叔父は園田孫兵衛と言ひて、文三の亡父の爲めには

實弟に當る男、慈悲深く、憐ッばく、加之も律義眞當の氣質ゆゑ、人の望けも宜いが、惜哉些と氣が弱すぎる。維新後は兩刀を矢立に替へて、朝夕算盤を弾いては見たが、慣れぬ事とて初の内は損毛ばかり、今日に明日にと喰込で、果は借金の淵に陥まり、如何しよう斯うしようと足掻き跪いてゐる内、不圖した事から浮み上て、當今では些とは資本も出来、地面をも買ひ、小金をも貸付けて、家を東京に持ちながら、其身は濱のさる茶店の支配人をしてゐる事なれば、左而巳富貴と言ふでもないが、まづ融通のある活計。留守を守る女房のお政は、お摩りからずる／＼の後配、歴とした士族の娘と自分ではいふが……チト考へ物。しかし兎に角、如才のない、世辭のよい、地代から貸金の催促まで家事一切獨て切つて廻る程あつて、萬事に抜目のない婦人。疵瑕と言つては唯大酒飲みで、浮氣で、加之も針を持つ事がキツイ嫌ひといふばかり、さしたる事もないが、人事はよく言ひたがらぬが世の習ひ、「彼婦人は裾張蛇の變生だらう」ト近邊の者は影人形を使

ふとか言ふ。夫婦の間に二人の子がある。姉をお勢と言つて、其頃はまだ十二の蕾、弟を勇と言つて、是れもまた袖で鼻汁拭く灣泊盛り（是れは當今は某校に入舍してゐる宅には居らぬので）、といふ家内ゆゑ、叔母一人の機に入ればイザコザは無いが、さて文三には人の機嫌氣稜を取る杯といふ事は出来ぬ。唯心ばかりは主とも親とも思つて善く事へるが、氣が利かぬと言つては睨付けられる事何時も／＼、其度ごとに親の難有サが身に染み骨に耐へて、袖に露を置くことは有りながら、常に自ら叱つてザツト辛抱、使歩行きをする暇には近邊の私塾へ通學して、暫らく悲しい月日を送つてゐる。ト或る時、某學校で生徒の召募があると塾での評判取り／＼、聞けば給費だといふ。何も試したと文三が試験を受けて見た所、幸ひにして及第する、入舍する、ソレ給費が貰へる。昨日までは叔父の家とは言ひながら食客の悲しさには、追使はれたうへ氣兼ね苦勞而已をしてゐたので、今日は外に掣肘する所もなく、心一杯に勉強の出来る身の上となつたから、ヤ喜

んだの喜ばないのとそれはく、雀躍せきやくまでして喜んだが、しかし書生と言ッても是もまた一苦界、固もとより餘所外のおぼツちやま方とは違ひ、親から仕送りなどいふ洒落しゃれはないから、無駄遣ひとては一錢もならず、また爲しようとと思はずして、唯一心に、便たよりのない一人の母親の心を安めねばならぬ、世話になつた叔父へも報恩おんぐしをせねばならぬ、と思ふ心より、寸陰を惜んでの刻苦勉強に學業の進みも著るしく、何時の試験にも一番と言ッて二番とは下らぬ程ゆゑ、得難い書生と教員も感心する。サアさうなると傍わがが喧ましい。放蕩と懶惰だいたを経緯たていとの絲にして織上おりあがたおぼツちやま方が、不負ふけ魂たましひの妬み嫉みからおむづかり遊ばすけれども、文三は其等の事には頓着せず、獨りネビツチヨ除け物と成ッて朝夕勉強三昧に歲月を消磨する内、遂に多年螢雪の功が現はれて一片の卒業證書を懷き、再び叔父の家を東道とするやうに成ツたからまづ一安心と、其れより手を替へ品を替へ種々さまざまにして仕官の口を探すが、さて探すとなると無いもので、心ならずも小半年ばかり

煙くすぶッてゐる。其間始終叔母にいぶされる辛らさ苦しき、初は叔母も自分ながらけぶさうな貌をして、やはく吹付けてゐたからまづ宜よかツたが、次第にいぶし方に念が入ッて來て、果は生松葉に蕃椒とうがらしをくべるやうに成ツたから、其のけぶいこと此上なし。文三も暫らくは鼻をも潰つぶしてゐたれ、竟には餘りのけぶさに堪へ兼ね噎返むせかへる胸を押鎖めかねた事も有ツたが、イヤく是れも自分が不甲斐ないからだと思ひ返してデツト辛抱。さういふ所ゆゑ、其後或人の周旋で某省の准判任御用係となツた時は天へも昇る心地がされて、ホツと一息吐きは吐いたが、始て出勤した時は異な感じがした。まづ取調物を受取つて我坐になはり、さて落着て居廻りを視回すと、仔細らしく頸を傾けて書物かきものをするもの、蚤取眼になつて校合けうがふをするもの、筆を啣くはへて忙し氣に帳簿を繰るものと種々さまざま有る中に、恰ちやうどど文三の眞向ふに八字の浪を額に寄せ、忙しく眼をしばたゞきながら間斷もなく算盤を弾いてゐた年配五十前後の老人が、不圖手を止めて珠へ指ざしをしながら、

「エー六五七十の二……でもなしとエー六五」ト天下の安危此一舉に在りと言つた様な、さも心配さうな顔を振揚げて、其癖口をアソギリ開いて、眼鏡越しにジツト文三の顔を見守め、「ウー八十の二か」ト一越調子高な聲を振立てゝまた一心不亂に弾き出す。餘りの可笑しさに堪へかねて、文三は覺えずも微笑したが、考へて見れば笑ふ我と笑はれる人と餘り懸隔のない身の上。ア、曾て身の油に根氣の心を浸し、眠い眼を睡ずして得た學力を、斯様な果敢ない馬鹿氣た事に使ふのかと、思へば悲しく情なく、我になくホツト太息を吐いて、暫らくは唯茫然としてつまらぬ者でゐたが、イヤ／＼是れではならぬと心を取直して、其日より事務に取懸る。當座四五日は例の老人の顔を見る毎に嘆息而已してゐたが、其れも向ふ境界に移る習ひとかで、日を経る隨に苦にもならなく成る。此月より國許の老母へは月々仕送をすれば母親も悦び、叔父へは月賦で借金濟しをすれば叔母も機嫌を直す。其年の暮に一等進んで本官になり、昨年の暑中には久々にて歸省する

など、いろ／＼喜ばしき事が重なれば、眉の皺も自ら伸び、どうやら壽命も長くなつたやうに思はれる。茲にチト艶いた一條のお癖があるが、之を記す前に、チヨツピリ孫兵衛の長女お勢の小傳を伺ひませう。お勢の生立の有様、生來子煩惱の孫兵衛を父に持ち、他人には薄情でも我子には眼の無いお政を母に持つた事ゆゑ、幼少の折より插頭の花、衣の裏の玉と撫で愛まれ、何でも彼でも言成次第にヨイソレと仕付けられたのが癖と成つて、首尾よくやんちや娘に成果せた。紐解の賀の濟だ頃より、父親の望みで小學校へ通ひ、母親の好みて清元の稽古、生得て才濟の一徳には生覺えながら飲込みも早く、學問、遊藝、兩ながら出來のよいやうに思はれるから、母親は眼も口も一ツにして大驕び、尋ねぬ人にまで風聽する娘自慢の手前味噌、切りに涎を垂らしてゐた。其頃新に隣家へ引移つて參つた官員は、家内四人活計で、細君もあれば娘もある。隣づからの寒暄の挨拶が喰付きで、親々が心安く成るにつれ娘同志も親しくなり、毎日のやうに訪つ

訪れつした。隣家の娘といふは、お勢よりは二ツ三ツ年層で、優しく溫藉で、父親が儒者のなれの果だけ有ツて、小供ながらも學問が、好こそ物の上手で出来る。いけ年を仕ても兎角人眞似は較められぬもの、

況てや小供といふ中にもお勢は根生の輕躁者なれば、尙更倏忽其娘に薰陶れて、起居舉動から物の言ひざままで其れに似せ、急に三味線を癡却して、唐机の上に孔雀の羽を押立る。お政は學問などいふ正坐つた事は蟲が好かぬが、愛し娘の爲度と思ツて爲る事と、其儘に打棄てゝ置く内、お勢が小學校を卒業した頃、隣家の娘は芝邊のさる私塾へ入塾することに成つた。サアさう成るとお勢は矢も楯も堪らず、急に入塾が仕度なる。何でも彼でもと親を責がむ、寢言にまで言ツて責がむ。トいつてまだ年端も往かぬに、殊にはなまよみの甲斐なき婦人の身でゐながら、入塾などゝは以の外、トサ一旦は親の威光で叱り付けては見たが、例の絶食に腹を空せ、「入塾が出来ない位なら生て居る甲斐がない」ト溜息嚙雜ぜの愁訴、萎れ返ツて見せるに

兩親も我を折り、其程までに思ふならばと、萬事を隣家の娘に托して、覺束なくも入塾させたは今より二年前の事で。

お勢の入塾した塾の塾頭をしてゐる婦人は、新聞の受賣からグット思ひ上りをした女丈夫、しかも氣を使ツて一飯の恩は酬いぬがちでも、睚眦の怨は必ず報ずるといふ蚰蜒魂で、氣に入らぬ者と見れば、何歟につけて眞綿に針のチク／＼責をするが性分。親の前でこそ蛤貝と反身れ、他人の前では蜆貝と縮まるお勢の事ゆゑ、責まれるのが辛らさにこの女丈夫に取入ツて卑屈を働らく。固より根がお茶ツびいゆゑ、其風には染り易いか、忽の中に見違へるほど容子が變り、何時しか隣家の娘とは疎々しくなつた。其後英學を初めてからは、惡足掻もまた一段で、襦袢がシヤツになれば唐人鬚も束髪に化け、ハンケチで咽喉を緊め、鬱陶敷を耐へて眼鏡を掛け、獨よがりの人笑はせ、天晴一個のキヤツキヤとなり濟ました。然るに去年の暮、例の女丈夫は、教師に雇はれたとかで退塾して仕舞ひ、其手